

学外実習を含む学習を通じた“目指す保育者像”の変容

高村 和代 ・ 平野 朋枝

The Transformation of “The Image of The Ideal School Nurse” in The Course of Junior College

Kazuyo Takamura and Tomoe Hirano

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the transformation of the image of the ideal school nurses (people who take care of children at nursery school or kindergarten) in the course of a junior college. The students were instructed to write an essay on the theme of “my image of the ideal school nurses” twice (at the beginning of the 1st year and after the end of their educational trainings). 59 essays were investigated qualitatively.

First of all, the contents of the essays were classified into 4 categories; 1) the skill and knowledge of child-care, 2) personality, 3) understanding of the children, and 4) relationships with the parents/community. Two categories, “personality” and “understanding of the children”, appeared in a lot of essays at both times. The other categories didn't appear so much. Especially, these were not found very often in the first essays.

Furthermore, the differences of the contents of both times were investigated qualitatively. As for the results, the second essays were written more concretely. In addition, they tended to base their descriptions on their experiences of educational trainings.

Received Oct. 30, 2007

Key words : the image of the ideal school nurse, essays, qualitatively, educational training

問題と目的

保育者養成は主に短期大学または四年制大学がその役割を担っている。保育者を目指す学生は、それら保育者養成機関で学び、幼稚園教諭免許または保育士資格を取得した後は、即戦力としての活躍を求められることが多い。従って保育者養成機関は、学生が在学中に“保育者としての資質”(以下“保育者資質”)を十分に身につけるよう指導することが必要とされる。学生は、“保育者資質”を理解して“目指す保育者像”を描くとともに、それを自らの性格や得手不得手などと照らし合わせて自己課題を見出し、解決することで、より良い保育者へと成長する。そのためには様々な知識・技能の習得と「保育現場での実習」(以下“実習”)が不可欠であり、特に後者は、学生が“保育者資質”を理解し、身につける上で最も重要な機会であると言える。

保育者養成機関では、まず“保育者資質”を学生に呈示し、明確な目標を持って学習に取り組

むよう学生を刺激する必要がある。しかし、“保育者資質”は、保育の技能や幼児に関する様々な知識、人間性など多岐にわたっており、また人それぞれ“保育者に必要な資質”の捉え方は異なることが多く、明確な定義づけや整理がなされていない。『幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書』（2002）では、幼稚園教員の資質について次のように示されている。「幼児一人一人の内面を理解し、信頼関係を築きつつ、集団生活の中で発達に必要な経験を幼児自らが獲得していくことができるように環境を構成し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力を持つことが重要である。また、家庭との連携を十分に図り、家庭と地域社会との連続性を保ちつつ教育を展開する力なども求められている。その際、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うことに留意する必要がある。言うまでもなく、これらの教育活動に携わるにあたっては、豊かな人間性を基礎に、使命感や情熱が求められる。」このような記述は、未だ保育者として発達途上の学生には、大枠でのとらえ方であり具体性に欠けるため、自らの理想の保育者像として捉えることは難しい。より細分化され、具体的な観点が必要である。大西（2001）は、保育者を対象とした調査によって、‘保育者の資質’は、「人格・性格領域」「子どもとの関係」「おとなとの関係」「保育技術」「実習態度」の領域から説明することができるとした。また中村（2006）は、‘保育者像’を、「専門的知識・技術」「知的能力・行動力」「保育者としての使命感・意欲」「子どもに対する愛情」「性格」「教養・常識」「身体的資質能力」に分類している。しかし、これらの先行研究においても、‘保育者資質’や‘保育者像’についてのしっかりとした定義づけはなされておらず、分類の方法も研究者の考え方に依存している。

次に、保育者養成機関に求められるのは、個々の学生がどれだけ“保育者資質”を理解し、“目指す保育者像”を明確化して必要な能力を身につけているかを把握し、足りない部分を補うための援助をすることによって、より良い保育者へと導くことであろう。“保育者資質”に対する学生の理解は、入学した当初と卒業間近では大きく異なる。集団の、また個別の量的・質的な変容を分析し、学生が“保育者資質”を獲得する過程を理解することは、保育者養成にとって大変有用である。しかし、学生生活や実習を通した学生の意識変容を検討した研究は、事前に研究者が項目を設定し検討をしたものがほとんどであり、内容の深まりなど質的な変化は検討されていない（小林ら、2002；後藤、2006）。また高村（2001）は、短期大学2年次の学生に実習直後に自由記述調査を行い、質的な変化を検討しているが、縦断的な調査ではなく個人の振り返りによる調査であるため、被験者自身が時系列のなかで自らの変化を客観的に評価していない可能性がある。厳密に意識変容を検討するためには、縦断研究が必要であろう。

本研究では、大学入学の3ヶ月後、及び5回ないし6回の実習後における“目指す保育者像”を縦断的に分析することにより、学生が具体的にどのような保育者を目指しており、また実習を経験することによって“目指す保育者像”がどのように変容するかを明らかにすることを目的とした。

方 法

調査時期：実習前 平成17年6月（実習経験なし）

実習後 平成18年10月（5回ないし6回の実習経験あり）

調査対象：本学幼児教育学科学生63名（うち有効数59）

調査方法：「教育・保育実習指導」の授業内で『私が目指す保育者像』をテーマにした自由作文を書くことを指示し、回収した。

結果と考察

1. カテゴリーの抽出

『幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書』に記された“保育者の資質”の定義などを参考に、次のような4つのカテゴリーを設定した。

・保育の技術・知識

(記述例)

- 手遊び、ピアノ、絵本、紙芝居などの保育技術を身につけている
- 発達段階について理解している
- 適切な保育計画の立案ができる
- 場面に応じた援助の技術を持つ など

・人間性

(記述例)

- 挨拶がきちんとできる
- 明るく、笑顔で子どもと接する
- 子どもと共に成長する
- 自分が楽しむ姿を見せる など

・子ども理解

(記述例)

- 共に遊ぶことで一人ひとりを理解する
- 子どもの目線で見ると考える
- 子どものわずかな変化を見逃さない など

・親・地域との関係づくり

(記述例)

- 保護者との連絡を密にする
- 保護者の相談に乗ることができる
- 地域と連携する など

提出された自由作文中に、これらのカテゴリーに分類される内容がどの程度含まれているかについて、研究者2者の協議のもと評定を行った。なお、作業時には評定者の解釈が入らないよう、留意した。入学直後と全実習終了後の作文に含まれる各カテゴリーの件数を、Table 1 に示す。

Table 1 各カテゴリーが記述されている件数

	保育の技術・知識	人間性	子ども理解	親・地域との関係作り
実習前	27件 (45.8%)	43件 (72.9%)	42件 (71.3%)	14件 (23.7%)
実習後	33件 (55.9%)	45件 (76.3%)	45件 (76.3%)	26件 (44.1%)

「人間性」及び「子ども理解」についての記述は、実習前から多く見られ、実習後と比較しても、記述件数に違いは見られなかった。このことから、「人間性」「子どもの理解」については、内容はどうであれ保育者として必要であるという意識は、実習を経験する以前から持っていることがうかがえる。一方、「保育の技術・知識」「親との関係づくり」については、実習終了後の方が記述件数は増えている。「親・地域との関係づくり」が実習前にはあまり記述の中に見られないのは、子どもを取り巻く環境を整えることも保育の仕事に含まれるという知識が一般的に乏しく、保育者の仕事が生徒のみに焦点づけられているという傾向が強いためと考えられる。少子化対策として厚生労働省よりエンゼルプランの策定がなされた頃より、保育現場での保護者に対する育児支援の必要性が大きくとりあげられてきている。そのため行政や保育現場では、親への支援の方法を模索し、様々な支援を提供するようになってきた。しかしながら、保育者を目指して専門的な学習を始めたばかりの学生には、保育機関のこのような機能について未だあまり認識されていないと言えよう。また、「保育の技術・知識」についての記述が増加した理由としては、授業や実習などを通して、その必要性や自らの能力不足に気づかされることによって、意識化されてきたことが考えられる。しかしこの点を明らかにするためには、作文の内容を質的に分析していく必要がある。

2. 作文の質的検討

実習前と実習後の内容の質的な変化について、個々の作文から探索的な検討を試みた。以下に、カテゴリーごとに特徴的なケースを例示しながら考察する。

・ 保育者の技術・知識

このカテゴリーにおける各時期の記述例をTable 2 に記す。

Table 2 「保育の技術・知識」で見られる記述例

見られる記述 入学直後に	<ul style="list-style-type: none"> 生活習慣を身につけさせる 知らないことを教える 居心地の良い環境を作る 望ましい心身の発達を促す
見られる記述 実習終了後に	<ul style="list-style-type: none"> 叱ることも必要である（子どもが理解できるように配慮して） 優しさと厳しさの両面が必要である 援助において、「見守る」「待つ」ことも大切 遊び（手遊び・）知識、歌・お話（本・紙芝居）
見られる記述 共通して	<ul style="list-style-type: none"> 個に応じた援助ができる 喧嘩などの問題に対して適切に援助ができる 適切な保育計画を立てることができる 褒めることで成長を促す

この結果から、実習前は漠然とした記述であるものが、実習を経験したことによって具体的な記述に変化したことがうかがえる。これは実習で実際に子どもに関わったり、保育者の姿を観察したりすることによって、保育者にとって必要な技術や知識の内容が具体化されてきたためであろう。

以下に、実習後の作文の具体的なケースを示す。なお、以後記述されるケースについては、全て回収された作文の表現をそのまま記載している。

<ケース1>

『私が部分実習で製作をした時、子どもたちはすごく喜んでくれて、その時間以外でも友達同士で遊んでくれました。(中略) 保護者からの連絡帳にも、「家に帰っても遊んでいました」と嬉しい言葉が書かれてありました。私はこの時、もっと子どもたちに教材を紹介したいと思いました。(中略) 子どもたちが興味・関心を持ってくれるような保育教材をたくさん紹介できる保育者になりたいです。』

<ケース2>

『一日を通して、子どもたちにとって楽しいと思えるような遊びや手遊びをたくさん知っている保育者になりたいです。手遊びだけでなく、製作やマジックなど、子どもたちが見て、創造し、楽しめるような遊びができる人になりたいと思います。』

<ケース3>

『楽しい遊びの中にも、安全面に配慮することは忘れず、指導案を書く時、実際に活動を行ってみて、危ない時はすぐに対応したいです。』

<ケース4>

『運動遊びを行う際には、子どもたちの運動能力・体力を把握しておく必要があると思います。』

これらのケースは、いずれも実習前には「保育の技術・知識」に関する記述が見られなかった。しかし、実習後に書かれた作文では、非常に具体的に記述されている。ケース1及びケース3では、実際の経験から意識化されてきている様子が具体的に記述されている。

このカテゴリーに関する内容は、机上の知識のみでは意識化されにくく、実際の体験から得られるものであることが示唆された。

・ 人間性

このカテゴリーでは、実習前と実習後の表現の違いはほとんど見られなかった。いずれにも共通して、Table 3 に記すような表現が頻出していた。

Table 3 「人間性」で見られる記述

見られる記述 共通して	<ul style="list-style-type: none"> ・ 明るく、元気である ・ 笑顔で接する ・ 挨拶ができる ・ 子どもを好きである ・ 常に学ぶ気持ちを持っている
----------------	---

続いて、以下に実習後に書かれた特徴的なケースを記す。

<ケース5>

『(実習で) 保育者自身が楽しんで活動することが大切だと感じたので、活動を楽しむという気持ちを大事にしたいです。(中略) 保育者が楽しんでやらないと子どもたちにその気持ちが伝わらないと思います。』

<ケース6>

『保育者自身が楽しんで遊んでいたりとすると、それが子どもたちにも伝わります。』

<ケース7>

『保育者が子どもたちと一緒に喜んだり楽しんだりすると、子どもたちも、より喜んだり、楽しんだりして、とても場の雰囲気が良くなります。』

これらの記述は全て「自分自身が保育で取り入れた活動そのものを楽しむ」ことの必要性が書かれているが、なぜそれが必要なのかという根拠も書かれている。Table 3のように、実習前と実習後では、表現の変化はほとんど見られなかったが、個々のケースを分析すると、実習後では、なぜそのようなことが必要かといった根拠に言及しているケースが散見される。つまり、実習での保育経験を通して保育者として必要な資質が内在化されてきたと言えるのではないだろうか。

・ 子ども理解

このカテゴリーも「人間性」と同様に、実習前後で表現に違いは見られなかった。また、表現のばらつきもほとんど認められなかった。多くの作文において、「子どもの目線で見ると／考える」「一人ひとりの個性を認める」という表現が使われていた。

以下に実習後に書かれた特徴的なケースを記す。

<ケース8>

『(実習先のクラスで) 担任の先生は、給食の時間に給食をあまり食べていなくて落ち着きのない子どもを見ると、体温計を持ってその子の席に駆けつけました。その子は熱があり、先生は保護者の方にすぐ電話をしました。私の方がその子の近くにいたのに気づいてあげられませんでした。(中略) 普段の子どものちょっとした変化に気づける保育者になりたいです。そして、子どもが病気やケガをした時、適切な応急処置ができるようにしておきたいです。』

このケースは、実習中の反省から、子ども一人ひとりをよく見ることの大切さを痛感し、さらに保育に関する知識の必要性にも気づいている。実際の経験から、より具体的な資質に言及できるようになったことがうかがえる。このケースも「人間性」と同様に、経験を通して保育者として必要な資質が内在化されてきているということがいえるのではないだろうか。

・ 親・地域との関係づくり

Table 1で示されたように、このカテゴリーには実習前における記述は非常に少ない。また、時期による表現の違いはほとんど見られず、内容のばらつきもなかった。「親と情報交換をする」「親とのコミュニケーションをとる」という表現がほとんどであった。実習前後いずれにも記述があり内容に深まりが認められるケースを以下にあげる。

<ケース9>

実習前

『親と保育者との交流ができると良いと思います。今日はこうだった、こうすると良いと思う、など、お互いの思いや子どもを見ていてのことを理解し合えると良いと思います。』

実習後

『保護者としっかりコミュニケーションをとれるようになりたいと思います。直接話すこと、連絡帳を使って話すことを大切にしたいです。園での子どもの様子、家庭での様子を理解し合えると良いと思います。(自分の)責任実習で何を行ったかを、先生が保護者に伝えていました。すると次の日、保護者から「家で、子どもがとても喜んでいた」という話があったことを私に教えて下さいました。その時、私はとても嬉しかったと共に、情報交換があることで、子どもの姿を本当に良く知ることができると思いました。園の中の様子だけでなく、家での様子も知ることができ、一人ひとりのことを多く理解していきたいと思います。』

このケースでは、入学直後より親との交流の必要性が意識されている。しかし、実習終了後の記述には、実習での体験からより具体的なコミュニケーションの方法が提案されている。このケースも「保育の技術・知識」と同様、実習などの体験を通して、より具体化された内容に変容した様子がうかがえる。しかしながら、このカテゴリーに関しては、このカテゴリーに属する表現が見られたケースでも、ほとんどにおいて具体的な記述がなされていなかった。授業及び実習で、子育て支援についての知識を身につけてはいるが、実習生の立場では親や地域との関わりを体験することが非常に少ないためであろう。

これまで例示したどのケースからも、実際に子どもや保育者と関わる経験によって、“目指す保育者像”の内容に深まりがうかがえた。以下に特にその様子が顕著なケースを記す。

<ケース10>

実習前

『いろんなタイプの子どもがいる。私は、その子一人ひとりに合った対応をしたい。〔→子ども理解〕(中略)私が自信を持って子どもに関わり、いろいろなことを教えてあげたい。(中略)明るく、笑顔で子どもに慕ってもらえるような先生でいたいと思う。〔→人間性〕』

実習後

『いろいろな活動や遊びの中で、子どもと一緒に積極的に向き合い、一緒になって楽しんだり、喜んだりできることが大切だと思う。〔→人間性〕その中で、子どもの可能性を意識した言葉掛けや援助をし、いろいろな体験を通して子ども自身が学び、発見できる保育をしたい。〔→保育の技術・知識〕子どもたちの気持ちを受け入れ、子どものお手本になりたい。また、子どもの成長を認め、努力と一緒に共感したい。(中略)保育者として、元気で明るく、必要とされる人間であるよう、何事も気持ちよく受け入れて努力したい。〔→子ども理解〕』

このケースは、実習前後のいずれにおいても複数のカテゴリーの記述が認められるケースである。しかしその内容においては、実習前は漠然とした理想像を記述しているのに対し、実習後にはより具体的な記述に変化している。

総合考察

本研究では、入学直後と実習を全て終えた時期に書かれた“目指す保育者像”に関する作文の内容を、筆者が設定したカテゴリーに分類し、その件数の違いについて検討した。その結果、「人間性」「子ども理解」については、調査時期による記述件数の違いはほとんど見られなかった。各カテゴリーにおける質的な変化について、作文の内容から検討を試みた。その結果、1回目と2回目の調査の間の約1年半において、“目指す保育者像”がより具体化されていた。具体化された大きな要因として、実際に子どもや保育者と関わることのできる実習経験の影響が大きいと考えられる。ケース1、3、5、8、9では、実習での事例を提示して具体的な保育者像を記述するなど明らかに実習が意識を変容させるきっかけとなっていることが分かる。また、他のケースについても、実習での経験を踏まえた記述がなされている。このことから、学生が“保育者資質”を身につけるためには、実習という体験が非常に重要であることが示唆された。

大学では、講義や演習などで保育に関する技術や知識を教授し、学生は各分野毎に系統立てて理解や技能を深めている。一方、実習は、より実践的で、総合的である。大学でもサークル活動や演習科目などで、子どもや保育者と関わる体験をする機会があるが、単発であること、また「見せる」「教える」など一方的な活動であることが多い。本研究で検討した作文や学生から直接聞く話を鑑みても、それらの体験よりもやはり実習が学生にとって大きな影響を及ぼしていると考えられる。実習は、一保育者としてひとりで考えて進めていかなければならないということから、強い責任感が必要となる。また強い責任感を要求されるが故に、非常に強い緊張感を伴う。そのような責任感や緊張感が、“保育者資質”への意識を高め、理想の保育者像へと成長させるために重要であると考えられる。

保育者養成機関では、本研究で示された学生の“保育者資質”に対する理解の変容や、その変容を導く実習の重要性を認識し、指導を行う必要がある。また、“保育者資質”の定義や整理のしやすさについてさらなる研究を進めて、より学生が理解しやすい教授法を確立し、全ての学生がより質の高い保育者を目指すよう努力すべきである。

引用文献

- 後藤永子 2006 教師として保育指導のあり方を考える－保育者養成校における学生の意識変容－
岐阜女子大学紀要 35 Pp.103-109.
- 小林房子・掛塚芳子・尾島万里 2004 保育者養成に関する一考察：保育実習（保育所）における意識の変容 清泉女学院短期大学研究紀要 23 Pp.29-50.
- 中村勝美 2006 保育学生の保育者像と保育者養成教育に関する一考察 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 36 Pp.139-146.
- 大西道子 2001 保育者の資質に関する研究(2)：幼稚園・保育園現場と学生の資質重要度の比較 札幌大谷短期大学紀要 32 Pp.33-46.
- 高村和代 2001 教育実習が職業意識およびアイデンティティに及ぼす影響に関する探索的研究：幼稚園実習直後に着目して 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要 33 Pp.65-75.
- 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議 2002 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書 文部科学省